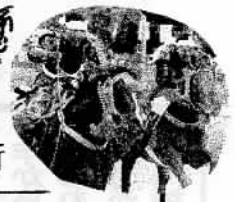
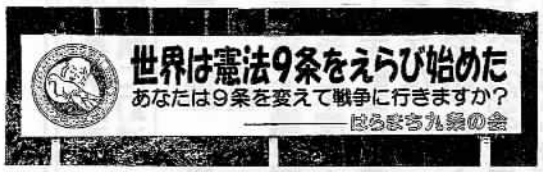
7/28(土)出陣、7/29(日)神旗争奪戦
今日から相馬野馬追 7/30(月)野馬懸



九条はらまち

福島県「はらまち九条の会」会報 **No.319**

2018（平成30）年 7月28日（土）発行



看板の大きさは：横450cm、縦90cm、全高240cm。10年経っても色鮮やかです

○南相馬市原町区錦町、県道12号線沿いの本会の看板。2008年8月15日の終戦記念日に建立されたので**今年で満10年に**なります。被災地訪問で訪れた県内外の「九条の会」の方から、よく「大きさはどれくらい？」という質問があります。

○秋になると周囲は、平田会長の奥様が丹精込めて手入れされたコスモスが美しく咲き乱れます。

特集 次々に『福島民報』に掲載 本会会員の新聞投書 ①

大震災と原発事故で人生を一変させられ、地域を根こそぎ破壊された私たちですが、理不尽さや人権を蔑ろにされたままでは、それを黙認したことになります。おとなしい東北人でなく、“まつろわぬ民”を示す発信を続けていきたいものです。

○5月6月、続々と、「**はらまち九条の会**」会員の投書が、「**福島民報**」に採用掲載されています。

○政治をただし、民主主義を守り憲法実現のため、私たちの思いを発信し続けましょう。

◀屋中茂夫さんは5月2日に、▼二上英朗さんは6月6日の「みんなのひろば」に掲載されました。

内閣人事局設置 政治不信の元凶

郡山市・屋中 茂夫（無職 65）

「私や妻がもし、森友学園問題に関わっていたのであれば、総理大臣も国会議員も辞める」。安倍晋三首相のこの答弁を機に、森友問題は政局化し、さらに加計学園問題や自衛隊の活動日報隠蔽（いんぺい）、財務事務次官のセクハラ疑惑と、不祥事が相次ぎ、国会は空転している。国会が厳しく行政監視を果たすべき時なのに、このような事態は、国民側からすれば、うんざりである。

安倍政権下で前代未聞の異常事態が生じた大きな原因は、四年前に内閣人事局を新設し、官邸主導で各省庁の幹部職員の人事権を握るようになったことにあると思う。

人事局は、政治家の目に留まる官僚ばかりを重用しているような感じである。政治家による恣意（しい）的な人事が行われるようになったのだ。

そして、官僚は政治家に認めてもらいたいと思って忖度（そんたく）の心が芽生える。こうした流れが政治不信につながっているのではないか。

憲法の聖地小高 新たな逸話発見

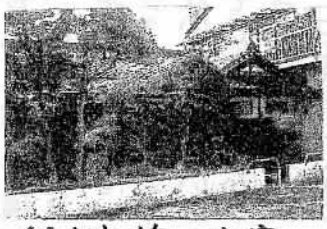
福島市・二上 英朗（南相馬市歴史専門調査員 65）

百二十年前の明治三十一年五月十一日に小高駅が開業した時にも、また常磐線の未開通部分だった、双葉地方の小高と久ノ浜間が同年八月二十三日に全通した時にも、全てただ一人で報道したのは、福島民報の吉田菊堂（本名騎一郎）という記者だった。

当時は一日に上り下り各二本だけだった。そこで宿泊せざるを得なかった彼を泊めたのが、後の衆院議員で事業家だった半谷清寿社長の秘書役を務めた、鈴木余生（良雄）という小高銀行の支配人だったことを発見した。

鈴木は相馬野馬追の観光を福島民報にPRし、町興隆の旗を振ったが、惜しくも二十七歳で夭逝（ようせい）した。死の直前に長男安蔵をもうけた。これが後に日本国憲法の民間草稿を執筆した鈴木安蔵博士である。小高町は博士が十七歳まで生活した、日本国憲法の〝ふるさと〟と言える。

憲法冊子を全戸配布した南相馬の聖地で、常磐線と相馬野馬追、それに鈴木安蔵博士の生家、福島民報がつながった。生家も文化財として保存運動を展開中だ。新たな逸話の誕生を喜んでいる。



南相馬市小高区仲町

鈴木安蔵の生家

No.319 「福島民報」に掲載　本会会員の投書 ②

経産省基本計画 原発固執に幻滅

南相馬市・佐藤　邦雄（無職　86）

経済産業省は有識者会議で、二〇三〇年度のエネルギー基本計画の素案を取りまとめた。

電源構成を原子力20～22％、石炭火力26％、再生エネルギー22～24％としている政府方針の実現に全力を挙げるという。さらに、原発を重要なベースロード電源と位置付け、核燃料サイクル政策を維持するとのことだ。

ここには、東京電力福島第一原発事故の教訓は生かされているのだろうか。原発ゼロを願う国民の願いは、反映されているのだろうか。

事故を起こした福島第一原発四基の廃炉に、三十年から四十年もかかるといわれているが、見通しはつかない。放射性物質や汚染水の処理問題も残されたままだ。それにかかる膨大な費用などを考えると、十二年後も原発に固執するのはおかしいと感じる。

昨年十月に福島地裁が下した「生業訴訟」の判決は、人格形成に必要な大気を汚染したこと、水質や物質汚染、家族や地域コミュニティーなどの「平穏的生活権」を認定した。私たちは、原発ゼロで平穏な生活を送りたいと願っている。

津波で消えた緑 再び育成しよう

南相馬市・佐藤　喜彦（会社員　30）

両陛下にとって最後となる全国植樹祭が、南相馬市で行われました。さまざまな関係者の方々が念入りな準備を行い、無事に終了しました。

東日本大地震の津波により、変わり果てた土地は、以前の光景を想像できないほどひどい姿でしたが、田んぼに水が入るなど、少しずつではあってもハード面は整いつつあります。農家や建設会社の方々の努力に加え、地元をはじめ多くの方の力添えがあったおかげだと思います。

これからは、住民がその地に緑を育てていく時期だと感じます。緑がなくなってしまったのならば、緑を育てる地域にしていき、景色を育てていきたいものです。

震災前の景色は、それまでそこに住んでいた住民が、ずっと諦めずに継続してきたことで残ってきました。残念ながら津波によって流されてしまいましたが、また一から緑を育て上げて、後世に「大津波があって大変だったものの、諦めずに復興に取り組んできた」ということを、形にして残していこうではありませんか。

批判できぬ議員 従順さあきれる

南相馬市・斎藤　良一（無職　67）

中国の歴史書の話だそうだが、秦の時代の政治権力者が幼少の皇帝に、鹿を馬だと言って献上した。「馬ではなく鹿だ」と正直に言った者は殺され、家臣の多くは「馬」と答え生き残った。

昨今の日本の政治状況と酷似している。内閣人事局が各省の幹部約六千人の人事権を握り、〝適材適所〟として、官邸に従順な人物を重用してきたのだろう。

公文書の改ざん、隠蔽（いんぺい）、国会答弁などは「面従腹背」かもしれないが、官邸を守らなければエリート官僚として生きていけないという恐怖感で仕事をしているように思われる。

与党の国会議員はもっと切実な思いではないだろうか。首相と同じ考えの議員だけではないだろうに、政権担当能力が疑われる不祥事の続発にも弱々しい政府批判しか出てきていない。

党公認を受けなければ当選は難しい。官僚よりも強い恐怖心で従順になるだろう。外国の報道は日本政府に厳しいのに、党内では「総裁三選」などが話題になることに、あきれるばかりである。

自浄能力失った政権「ウソコギ」

福島市・山崎　健一（無職　72）

現政権は、自浄能力を失い、支持率が下がっている。憤りを込め、古里・相馬双葉地方の方言で表現すると…。

安倍晋三首相や与党議員、官僚の発言は「ウソコギ」（うそつき）で、「シャッパグッチ」（知らないふり）る。ないとしていた記録が見つかり改ざんがあっても不起訴で「ゴセヤゲル」（腹が立つ）。「ズルカ」（ずるいこと）して「ショウシ」（恥ずかしい）とは思わないのだろうか。

「モサクサイ」（見苦しい）が、国民はすぐ忘れるから「サスケネー」（気にしなくてよい）ということか。でも「ズノル」（生意気）と、いつか「バヂ」（罰）が当たり、「カンカチ」（やけど）するぞ。

東京電力福島第一原発事故に遭った本県民に寄り添っているとは思えない。極め付きは「アンベワリー」。本来は身体の具合が悪いの意味だが、安倍夫妻が悪いと解釈して、笑い飛ばしたい。

▲掲載日は、佐藤邦雄さん6月2日、佐藤喜彦さん6月14日、斎藤良一さん6月13日、山崎6月10日。